

上田秋成の古典学と文芸に関する研究

著者	勝倉 壽一
号	77
発行年	1992
URL	http://hdl.handle.net/10097/14517

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 77 号
学位授与年月日 平成5年3月24日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学位論文題目 上田秋成の古典学と文芸に関する研究

論文審査委員 (主査)

教授 菊 田 茂 男 教授 鈴 木 則 郎
教授 佐々木 昭 夫

論 文 内 容 の 要 旨

内容目次

序説

1. 秋成の評価と問題
2. 学芸・文化の動きと秋成
3. 本論文の目的
4. 本論文の構成

第1編 上田秋成の古典学

第1章 近世古典学と秋成

第1節 契沖学と秋成

1. 契沖学との出会い
2. 契沖学への関心
3. 契沖の万葉学と秋成
4. 契沖の歌論と秋成

第2節 真淵の古典学と秋成

1. はじめに
2. 古典学と創作との関係
3. 真淵国学と秋成の古典学

第3節 秋成の古典研究の目的と方法

1. はじめに
2. 秋成の万葉研究の目的
3. 秋成の古典学の意義

第2章 『万葉集』研究

第1節 秋成の万葉歌批評－「まこと」－

1. 「まこと」論の流れ
2. 「まこと」と「をさなし」
3. 「まこと」の諸相

第2節 秋成の万葉歌批評－「調べ」－

1. 「調べ」と「姿」
2. 「調べ」と詠唱の関係
3. 万葉歌と「調べ」

第3節 秋成の万葉歌批評－「巧み」－

1. はじめに
2. 「巧み」の否定的評価
3. 「巧み」の肯定的評価
4. 万葉歌の技巧について

第4節 人麻呂・黒人の近江荒都歌と秋成

1. はじめに
2. 秋成の荒都歌評
3. 人麻呂歌と秋成
4. 黒人歌と秋成

第3章 万葉歌人論

第1節 万葉歌人論概観

1. 中古・中世の万葉歌人評
2. 近世の万葉歌人評

第2節 秋成の万葉歌人論

1. 柿本人麻呂
2. 山部赤人
3. 大伴旅人
4. その他の群像

第3節 額田王と秋成

1. はじめに
2. 額田王の伝記考証
3. 秋成の王歌批評

第4節 山上憶良と秋成

1. はじめに
2. 「令反感情歌」の論
3. 「貧窮問答歌」の解釈
4. 遣悶発憤の歌

第4章 中古文芸研究

第1節 秋成の『古今和歌集』批評

1. 歌学修業と『古今和歌集』
2. 『万葉集』の題号と『古今集』仮名序
3. 近世歌学と秋成

第2節 中古・中世和歌論

1. はじめに
2. 中古和歌観
3. 中世和歌観

第3節 『ぬば玉の巻』の研究史的意義

1. 問題の所在
2. 宗教的・勸懲主義的文芸観の批判
3. 秋成の物語観
4. 『源氏物語』評論

第4節 『よしやあしや』の研究史的意義

1. 研究史と秋成
2. 題号と成立事情
3. 寓言説について
4. 『伊勢物語』の様式の問題

第5節 『冠辞考統貂』の研究史的意義

1. 枕詞研究史と秋成
2. 『冠辞考統貂』序文の分析
3. 秋成説の形成過程
4. 「冠辞考統貂」の特徴

第5章 古代史研究と秋成

第1節 秋成の歴史意識と創作

1. 問題の所在
2. 史書不信と創作への関心
3. 神話と古代史観
4. 人格論的歴史解釈

第2節 万葉・古代史研究と創作

1. 問題の所在
2. 秋成の万葉・古代史研究と「歌のほまれ」
3. 「歌のほまれ」の構想
4. 「鴛央行」における物語の方法

第2編 上田秋成の文芸

第1章 物語観の形成と古典学・創作との関係

第1節 著書発憤説と秋成

1. 問題の所在
2. 不遇意識の生成
3. 「狂蕩」と「憤り」

第2節 古典学と創作との関係

1. 「太史公自序」と秋成
2. 古典学と「憤り」
3. 『春雨物語』の創作意識

第2章 中期の創作

第1節 秋成の紀行文－「去年の枝折」を中心に－

1. はじめに
2. 実生活と学問・創作との関係
3. 「秋山記」の構成
4. 「去年の枝折」の構想
5. 「去年の枝折」における芭蕉批判の意義

第2節 「書初機嫌海」における諷刺の性格

1. はじめに
2. 秋成書簡と序文
3. 「洛外半狂人」の意味
4. 戯印の意図
5. 世相風俗の諷刺
6. 学問・思想界批判
7. 諷刺の性格

第3節 「月の前」の構想

1. はじめに
2. 中・近世期の頼朝評価と秋成
3. 出会いの構図
4. 歌道の誠
5. 弓馬の道
6. 火取りの猫

第4節 「剣の舞」私見

1. 成立の問題
2. 史実・伝承と秋成の方法
3. 静の尋問
4. 政子の説得
5. 静の舞
6. 「残忍」の形象

第5節 「ますらを物語」論

1. 作品成立の契機
2. 物語の基本構図
3. 公的处理の問題
4. 烈女の悲哀
5. 道理と「物狂ひ」

第3章 『春雨物語』

第1節 「血かたびら」の解釈

1. はじめに
2. 善柔の性と譲位
3. 夢告の意義
4. 空海への下問
5. 皇太弟との問答
6. 譲位と薬子の乱

第2節 「天津処女」論

1. 問題の所在
2. 嵯峨帝の形象
3. 文化史的批判
4. 儒仏二教の影響

5. 宗貞像の形象

第3節 「海賊」論の基礎—その造形性と批評精神—

1. はじめに
2. 承和の変と秋成
3. 海賊秋津の形象
4. 歴史批評の分析
5. 批評精神と創作

第4節 「二世の縁」私見

1. 仏教批判の問題点
2. 入定説話の近世的解釈
3. 人生苦界の認識
4. 「いぶかしさ」の表明

第5節 「目ひとつの神」論

1. 研究史と問題
2. 戯画化説の検討
3. 堂上歌壇批判仮託説の検討
4. 乱世の設定
5. 文化史的批判

第6節 「死首のゑがほ」論

1. 事実と構想
2. 人物形象と町人倫理
3. 五蔵像の問題
4. 夢想と挫折

第7節 「捨石丸」の構想

1. はじめに
2. 長者の設定と捨石丸の形象
3. 冤罪の形成過程
4. 主殺しの法的問題
5. 日高見神社の位相
6. 再会の場の構成
7. おわりに

第8節 「宮木が塚」論

1. 研究史と問題
2. 物語と手向け歌との関係
3. 「そらごと」の方法
4. 宮木の死の意味

結語

既発表論文リスト

序 説

今日、上田秋成は近世中期に活躍した初期読本の作家として、日本古典文芸史に確固たる位置を占めている。その代表作『雨月物語』は中国小説の翻案を主とし、日本古典・古伝承などの影響のもとに形成された構想の妙と、典雅な擬古文体、缥缈とした怪奇浪漫の世界に纏綿する幻妖の美は、近世小説史に独自の光芒を放っている。また、『春雨物語』は数種の稿本で伝わるが、老年の秋成が貧寒・不遇な生活のなかで到達した歴史観・人間観・人生論の総決算として、蒼古な文体とともに当代の戯作的な文芸界とは隔絶する秋成文芸の孤高な達成を示している。

ところで、この時期における学芸・文化の動きを端的に言い表すならば、学問と文芸創作の接近、及び思想界を含めた三者の濃密な交渉を挙げることが出来る。その典型として秋成の学問、思想的発言、文芸の創作は総合的な把握を必要とする。そのような視点から秋成の研究史を通観するとき、『雨月物語』『春雨物語』が日本古典文芸の高度な達成点を示すものとして研究者の関心を集め、豊富な学問的成果を生み出しているのに対し、思想的方面は本居宣長との論争の当事者として比較検

討されるに止まり、秋成の古典研究は殆ど関心の対象外に置かれてきたように思われる。

しかし、秋成の学問・思想・文芸の創作は、その不遇・酷薄な生涯と自意識を思索の基礎に据えた人生観・社会観・歴史観の表出として統一的・相関的な姿をなしている。即ち、宣長の古道主義・復古主義の信念体系と鋭く対立する秋成の神話・古代史観は、大阪町人社会の厳酷な現実を生き抜いた敗残の生と現実認識を背景としており、古典研究から国学の思想的くびきを排除することにより、独自の文芸論的な成果を生み出す根拠をなした。また、その古典・古代史研究への沈潜と、宣長との思想的な対立が独自の歴史観・社会観の形成と人間洞察の機会を生み、『春雨物語』を中心とする中・後期の文芸創作の機縁をなしたことも銘記されなければならない。

また、秋成の文業において、その古典・古代史研究と思想的立場、及び文芸の創作を結び付ける核をなしたものはいかなるものであったのか。その核をなすものに直接関わる問題として、秋成の実人生における家業廃棄、郷土出奔、親族離散に伴う不遇意識と、その内実としての自責（罪）・天罰の意識、大阪庶民社会への復帰願望と「狂蕩」の生を生きる決意、及び漂泊・狂蕩の生に導いた学問・文芸への後悔と執着などの複雑な問題が存在する。更に、不遇意識が公的・私的な「憤り」に転化しえず、反骨・独立自尊・逃避・諦観のいずれにも自らを律しえない「もの狂ほしさ」が、世俗社会、学問・思想界、諸権威の不正、欺瞞、歪曲、賢しらへの強烈な批判意識となって、その古典・古代史研究、思想的発言、文芸の創作に投影される姿を認めることが出来る。その批判意識は、著作理論上は著書発憤説となって現れ、『源氏物語』『伊勢物語』に発憤説を見る独自の作品論、古典・古代史研究における不遇者への共感と、不公正、歪曲、賢しらへの「憤り」となり、中・後期の文芸創作の基盤を形成することになる。

従って、秋成の文業の総体は、著書発憤説を基底に据えた古典・古代史研究、物語論、古典評論、中・後期創作などの分析と、それらの類縁関係、影響関係の解明により、秋成の古典学を近世の研究史の中に定位するとともに、その文芸世界の特質を究明し、総合的な評価に導くことが肝要である。特に、秋成文芸の総決算とも言うべき晩年の『春雨物語』の文芸的特質の解明に上の視点は不可欠であり、ひいては近世文芸史、学問史における秋成の位相も上のような総合的考察を踏まえることによって定めうと考えられる。

賀茂真淵から宣長に継承発展を見た当代国学の目的と方法に対して、「道の学問」と決別した秋成の古典研究と古代史研究の総体をいま「秋成の古典学」と規定しておく。

宣長との論争の決定的な敗北を契機とする秋成の中・後期の創作は、長年の古代史研究から帰納された人格論的歴史解釈を基礎に据えて、儒仏二教の湿潤による国風の変質と国学的人間の歴史の場における検証を主たる目的として構想されたのである。

また、公的な歴史の記録である「ふみ」の真実性への不信は、そのまま現実への関心にも転化しうる。世俗的な形式的倫理観による公的決着や伝承の虚妄への批判と、現実次元における真実追求の方法として物語の自立性を主張しようとする意図から、『春雨物語』は当初構想された歴史小説集から当代社会の人間・事象を含む作品集に構想の変更と拡大を見ることになった。

秋成における古典学と創作との関係は、学問のもたらした新たな認識の目によって歴史的・現実的な社会の諸事象や人間性を洞察し、新たな問題意識の開発と、独自の歴史解釈、新たな人間観・生命観・運命観を文芸の場に形象しえたところに認められる。八文字屋本系の末期浮世草子から出発し、当代文芸壇の新興の気と多彩な営みの精華を『雨月物語』の怪奇浪漫の世界として描いた秋成は、その波瀾に富んだ「狂蕩」の生涯と、古典学への精進、思想形成の精髓を、高度な文化史観として『春雨物語』を中心とする中・後期の文芸に確立した。いまだ道徳的・教誡的・戯作的な文芸観が支配する近世小説界において、秋成文芸のみが孤高な達成を果たした所以は、この点に求めることができる。

第1編 上田秋成の古典学

本編は、秋成における学問の形成と、万葉・古代史研究を中心とするその古典学に関する考察を5章18節に分けて論述した。

第1章 近世古典学と秋成

本章は、秋成の古典学の形成に強い影響を与えた僧契沖の万葉学・歌学、真淵の古典学の影響内容と、秋成の学問的な批判・拒否の具体的な様相、及び秋成の古典研究の学問的意義について論じている。

第1節「契沖学と秋成」は、秋成の契沖学への関心と出会い、契沖の万葉学・歌学の秋成への影響と、批判の具体的な様相について分析した。秋成は契沖・春満・真淵の系統を万葉学の正統と位置づけ、その継承・発展の流れに自らの学問的な位相を定めたが、契沖の万葉学が文献学的な方面に止まるとする評価と、その歌論が表現機能の技巧面を中心に「はかなき」美的情趣を主としたのに対し、真情の率直・直截な表現を理想とする「まこと」の表現理念を主とする立場から、契沖学の客観的な分析・批判を行い、自らの万葉論を形成したことを論じた。

第2節「真淵の古典学と秋成」は、古典学を古道闡明の階梯にするという真淵の確固とした実践理論に対して、秋成の古典研究があくまで古典学の領域に止まり、真淵学の継承と拒否、評価と批判、及び真淵学からの離脱の意志を示した事情について分析した。秋成の思索は歴史的実在としての現実への批判意識とあるがままの現実容認との矛盾・撞着を晒し、社会観・人間観の矛盾を招いたが、その思索の根底に古代社会の理想化と復古思想が観念性に対する決定的な不信が存在したと、及び、理想と現実の乖離に直面した秋成が思想的統一を果たしえずに、真淵思想の歴史的・現実的な検証を国学的な世界観としてではなく、文芸的な形象性に求めたことを論じた。

第3節「秋成の古典研究の目的と方法」は、従来、秋成の古典研究が契沖・真淵・宣長らの学問と比べて注目されることの少ない理由として、考証学的な厳密性の欠如、文人的な遊びの姿勢を指摘されることが多いのに対し、万葉研究を中心とするその学問の基本的な目的と方法が、独立した文芸批評・評論・研究として文芸学的方法の初発的な意義を有することについて論じている。

第2章 『万葉集』研究

本章は、近世万葉研究史における秋成の万葉研究の独自の意義と問題について考察している。

第1節「秋成の万葉歌批評—まこと」、第2節「同一調べ」、第3節「同一巧み」は、秋成の万葉歌批評の中から万葉歌の心情・韻律・表現技法に相当する「まこと」「調べ」「巧み」という評言の用法を分析することにより、真淵の影響下に形成されつつ、その国学的な文芸観から離脱して形成された、秋成の独自の芸術的批評意識について論じた。即ち、契沖・春満・真淵の系譜が「まこと」の語義に倫理的な精神性を求めたのに対し、秋成の万葉観には国学的な思想性を排除し、万葉歌人の情意と感動の特質の解明と、美的・芸術的な鑑賞態度、及び批判的・否定的な側面への視野の拡大をはかるなどの独自の「まこと」の認識が見られる。また、「調べ」の働きについて、秋成は真淵の和歌詠唱の論に芸術的機能論の立場から語源的根拠を与え、声調面から万葉歌の芸術的意義を解明したところに特色が認められる。更に、真淵がその古代主義の実践理論として初期万葉歌の素朴・無技巧な詠風を理想としたのに対し、万葉歌全体の技巧に視野を広げ、その特色と積極的な意義を解明しえていることも注目される。

第4節「人麻呂・黒人の近江荒都歌と秋成」は、秋成における古文芸の研究と歴史論との密接な関連性を、壬申の乱の廃都を素材にした柿本人麻呂・高市黒人の近江荒都歌の悲哀の根源に迫ろうとする秋成の分析・批評を通して明らかにし、考証学を主とする近世万葉研究史における文芸論的な意義、及び現今万葉学における位置について論じた。

第3章 万葉歌人論

本章は、秋成の万葉研究のうち、歌人論に関する部分を独立させて構成されている。

第1節「万葉歌人論概説」においては、個人様式への関心の流れを中心に、中古・中世における万葉歌人批評と、近世期の契沖・荷田在満・真淵・伴蒿蹊・村田春海、及び秋成の万葉歌人批評を瞥見した。第2説は、秋成の万葉研究の中から、人麻呂・山部赤人・大伴旅人、及びその他の群像12名の歌人批評・個人様式への言及を整理し、近世万葉研究史における成果とその意義について考察した。

第3節「額田王と秋成」は、近世万葉学において注目された額田王の伝記考証と詠歌批評について、古代史の公記録への不審を万葉歌の考証によって埋めようとする秋成の歴史学的な関心と、運命的な境涯を生きた王の抒情に寄せる文芸的な関心との濃厚な関係性について論じた。また、その未分離性からくる限界性についても注目している。

第4節「山上憶良と秋成」は、近世万葉学において殆ど注目されることのなかった憶良の生涯と詠歌について、自らの赤裸々な人生回顧を重ねた秋成の強烈な共感意識を中心に秋成の憶良観と和歌批評の分析を行い、共感意識と和歌発憤を立論の根拠とする秋成の研究の問題点と、その立論が現今学界の理解の先蹤的位置を占めることについて論じた。

第4節 中古文芸研究

本章は、『古今集』、中古・中世の歌人、『源氏物語』、『伊勢物語』、枕詞などに関する研究をもって構成している。

第1節「秋成の『古今和歌集』批評」、第2節「中古・中世和歌論」は、秋成の万葉研究に付随して説かれた断片的な言説の再構成により、「まこと」の表現理念を基礎に据えた秋成の「仮名序」批判、中古・中世和歌の装飾的・技巧的な作風に対する評価と批判の具体的な様相について論じた。

第3節「『ぬば玉の巻』の研究史的意義」は、物語寓言説として知られる秋成の物語論の表現機能論と享受論の特徴と齟齬、寓言説に依拠した『源氏物語』評論の近世古典学上の意義、及び研究者秋成と創作家秋成との矛盾・齟齬の存在について論じた。また、第4節「『よしやあしや』の研究史的意義」は、『伊勢物語』研究史における秋成の題号論、成立論、及び著書発憤説を踏まえた立論の意義と、物語様式への関心について論じた。

第5節「『冠辞考続貂』の研究史的意義」は、古道解明に資するため記紀・万葉を基本文献として成立した真淵の枕詞研究書『冠辞考』に対し、その後編として纏められた『冠辞考続貂』の成立過程と中古文芸に依拠した本篇の枕詞研究史上の意義について論じた。

第5章 古代史研究と秋成

本章は、秋成の古典学の核をなす歴史意識、万葉・古代史研究の特色と、その創作への影響について論じている。

第1節「秋成の歴史意識と創作」は、秋成の歴史意識を記紀の評価と史書不信、神代史をめぐる宣長との論争と経験主義・実証主義的な歴史把握、及び人格論的・運命論的歴史解釈の諸点において捉え、史書不信と歴史の不合理に発する「憤り」が、著書発憤説・物語寓言説を踏まえたその歴史小説の方法との濃厚な連関性を有することについて論じた。

第2節「万葉・古代史研究と創作」は、秋成における古典学と創作との親近性、及びその基盤をなした古典学と物語観に通底する問題意識のあり方を、万葉・古代史研究とそれを踏まえた同素材による創作「鶯中行」「歌のほまれ」の分析を通して明らかにした。万葉・古代史研究から胚胎した近江荒都悲傷の思いが「鶯中行」を、万葉歌に対する世俗的評価の偏向への「憤り」が「歌のほまれ」を生み出した根拠と経緯について論じている。

第2編 上田秋成の文芸

本篇は、『春雨物語』を中心とする秋成の中・後期の創作活動と文芸的特質を、その古典学との影響関係に留意しつつ3章15節に分けて論述した。

第1章 秋成の物語観の形成と古典学・創作との関係

本章は、『春雨物語』を中心とする中・後期の創作の文芸的特質を解明するうえで基本的な問題

となる秋成の物語観の成立根拠と、古典学・創作との濃密な関係性について論じている。

第1節「著書発憤説と秋成」は、秋成の「憤り」を『雨月物語』解釈の思想的裏付けとする従来の理解を否定し、60歳の折の『よしやあしや』において『史記』の著書発憤説に依拠する独自の著作観の成立をみたことを踏まえ、その成立根拠をなした不遇意識の内実と晩年の「狂蕩」の生を分析することにより、中・後期文芸成立の思想的基盤としたことについて論じた。また、第2節「古典学と創作との関係」は、「太史公自序」における司馬遷の著書発憤の思想的根拠とその影響下に成立した秋成の著述観との類似性、秋成の古典学における「憤り」の内実、及びそれを踏まえた『春雨物語』序文における秋成の創作意識について論じた。

秋成の不遇意識は、『雨月物語』完成後の明和8年(38歳)の堂島火災による家業の破産に発し、医業に転業後の負債問題と、世俗悪や虚偽・欺瞞への「憤り」から医業を捨てて淡路庄村に退隠し、漂泊、親族離散、失明などの悲惨な体験を経て「狂蕩」の生を生きるなかで不動の人生認識となる。一方、医業の間に精進した古典学は、一家の学をなすという願いも空しく宣長の古道主義の主張の前に敗北し、不遇意識と結合して、著書発憤の思想に依拠した独自の著作観を生み出していくことになる。老年期の秋成は、「狂蕩」という生の否定の極北における傲然たる居直りの論理をもって、巨大な学問・思想界への挑戦の意志を示すのであり、晩年の『春雨物語』は公的な記録の恣意性や、国学の思想体系の観念性に対する決定的な不信を文芸の場に検証する意図を含むものであった。

第2章 中期の創作

本章には、安永8年の紀行文から、文化3年の「ますらを物語」に至る中期の創作5篇の構想について、秋成の学問・文芸観との関係に留意して論じている。

第1節「秋成の紀行文」は、中年期の紀行文「秋山記」「去年の枝折」の分析を通して、秋成における実生活と学問・文芸との相克の様相と、芭蕉の風狂の境涯への厳しい批判意識を基盤とする市井の文人・学者としての精神的な自己定立の模索について論じた。

第2節『書初機嫌海』における諷刺の性格」は、諷刺小説に込められた市井の文人・学者秋成の当代学問・思想界に寄せる厳しい批判意識と、独自の時代・文化批評に昇華しえないその限界性について論じた。

第3節『月の前』の構想」は、儒学者服部南郭が『吾妻鏡』の記載に従って、頼朝から拝領の銀製の置物を路上の児童に与えた西行の物欲に恬淡とした人間像を讀んで自著の「徳行篇」に収めたのに対して、秋成はその倫理主義的な歴史解釈を「過当」とであると難じ、世俗の権威と乞食僧の一場の対話を通して、頼朝の佞奸な人間性と風狂精神への相互批判を形象化していることを論じた。また、第4節『剣の舞』私見」は、義経・静に関わる膨大な史実と伝承を捨象して、鶴岡八幡における静の剣の舞に、権力者頼朝の「残忍」な属性と、その前に揺るがぬ静の悲劇的な人物像を継承していることを明らかにし、史書の歴史記述に対する不信と厳しい批判意識を基底に据えた秋成の創作の方法と、人格論的歴史解釈と呼ぶべき歴史意識の具体的な投影について論じた。

第5節『『ますらを物語』論』は、実在事件の当事者との邂逅を機に書かれた「まさし事」の事件記述の分析を通して、事件の公的決着への不信と厳しい事実認識に立脚した秋成独自の事件解釈、及び創作世界における「いつはりならぬ語言」と自立的な「ますらを精神」の形象方法について論じた。

第3章 『春雨物語』

本章は秋成の全文業の総決算的な意義を持つ『春雨物語』各篇の分析を通して、秋成の文化史観と人生認識のありかについて論じたものである。

第1節『『血かたびら』の解釈』、第2節『『天津処女』論』、第3節『『海賊』論の基礎』は、葉子の乱から承和の変を経て醍醐の治政に至る歴史物三部作について、平安初期の政治・学芸・文化に対する秋成の一貫した批評意識と、それを支える確かな歴史観の存在、及びその古典・古代史研究に支えられた独自の人物形象について論じた。

「血かたびら」は、平安初期の政治的混乱を背景に、その古代的・自然的で素朴な「直き」人間像が、熾烈な権力の争闘と「受禪廃立」の酷薄な政界の仕組の前には「善柔」に傾き、自ら混乱を招き寄せる平城帝の政治的不適性を描いて、秋成自身の平安初期政治史観を形象している。また、「天津処女」においては、嵯峨帝の唐風化政策が招いた平安初期文化の華美・頽唐の風の歴史的な必然性の認識と、その潮流に適應して栄達をはかる良峯宗貞のしたたかな政治的人間の形象に文化史観を託している。一方、「海賊」においては、政治的不遇者である文室秋津を制外者に定位して、醍醐治政下における政治・学芸・文化への批判を語らせることにより、儒者の延喜聖代観を廃した新たな歴史・文化史観を提示している。

第4節『『二世の縁』私見』は、近世の現実を生きる人間の宗教的救済への懷疑と自立を描いた「二世の縁」の分析を通して、国学思想の根幹をなす儒仏批判の歴史的・現実的な検証の果てに到達した人生苦界の認識と、人間存在への「いぶかしさ」の表明について論じた。秋成の眼は、仏教の極楽救済思想とそのための土中入定という苛酷な実践の是非のみならず、その愚昧性を暴いた後に残る貢納の愁嘆や牛馬にも劣る庶民の生活苦を見つめ、極楽再生を説く世俗仏教が庶民生活になお有効性を持つ現実に対する慨嘆を綴っているのである。

第5節『『目ひとつの神』論』は、文明・享祿後の乱世に歌道修業のために都に向かった若者の奇神との邂逅と、旧権威を盲信し、堂上歌壇に連なる夢想を抱いた若者の挫折を描いて、自ら「天資の廃人」と化した秋成の現今歌壇批判と、新たな芸術人生の開示を説く寓意小説・歴史小説の方法について論じた。乱世を舞台にした奇神の当代文化批判と憤りの表出を視点として、歴史的展開相としての現在の認識を読者に迫る新たな小説作法についても注目している。

第6節『『死首のゑがほ』論』は、近世社会を生きる若者の夢想と町人社会の酷薄な現実との乖離を描いた「死首のゑがほ」の人物形象の分析を通して、「直き心」が現実にも有効に機能しえずに悲劇を招き寄せてしまうという、秋成が形象化した国学的な人間像の矛盾と苦悩の内実について論

じた。

第7節『『捨石丸』の構想』は、主殺しの冤罪事件に関わる捨石丸・小伝次の形象に、秋成が現実社会を生き抜く人間像の理想を託した「剛毅朴訥の民」に内在する「ますらを」精神の精髓が描かれている事を明らかにした。即ち、秋成の理想的な人間像は、事実無根な主殺しの世論と封建秩序の不当な介入を招いた自然的・野性的な属性が、そのまま人間性の自然な発現として正の方向に転化し、悲劇的な境涯を超克する剛直・質朴な人間性に求められていたことになる。

第8節『『宮木が塚』論』は、30年前の遊女塚探訪の感動に発する秋成の「いつはりならぬ語言」の意志と、夥しい法然上人伝承と神崎遊女入水説話の虚偽性を廃して、遊女宮木像に酷薄な現実を生きる古代的な「たをやめ」像を形象し、その悲劇的な生と死を描く秋成の「そらごと」の方法について論じた。

結 語

上田秋成は、第一義的に『雨月物語』『春雨物語』を代表とする初期読本の作者として近世小説史に屹立する。しかし、『雨月物語』が中国白話小説の流行と当代文芸壇の新興の機運を背景とした、秋成の豊かな学識と詩人的な感性の産物として文芸性の定位を見たのに対して、晩年の『春雨物語』は、蒼古・佶屈な文体、思想性の露な構成と叙述、及び作品の背後に存在する作者の学問的な主張の強さにおいて『雨月物語』の表現様式とは決定的に相違する。そのために、従来の『春雨物語』研究史には、当代文壇・学芸壇との交渉の痕跡を探り、或いはその孤立性を強調するという矛盾が有り、『春雨物語』序文と作品収録に示された秋成の物語概念と、研究者の理解との間に物語観の齟齬を来している。

また、『雨月物語』は五度にわたる刊行を見たが、秋成が自作として記した事実は存在せず、文化4年の著作の井戸投棄後も秋成は窮死覚悟で『春雨物語』の完成に異常な執念を燃やしている。『雨月物語』完成後の秋成が約40年間にわたって創作活動を殆ど休止させ、古典・古代史研究に没頭したが、その思索の跡は『春雨物語』の内面世界とどのように関わるのか。更に、宣長との論争と「狂蕩」の境涯が秋成の人生観・社会観・学問観に与えた影響をどのように見定めるのか。60歳の時に書かれた『よしやあしや』の著書発奮説は、秋成の学問的な著作、文芸の創作といかなる整合性を有するのか。上のような疑問に対して、従来の秋成研究においては、秋成の古典・古代史研究は伝記研究や宣長との論争について論じる際の副次的な資料的価値のみが目されるに止まり、いまだ文芸の研究との結合や総合的な視点の確立はなされていないのである。

以上のような基本的な問題の解明のために、本論文が主張する秋成の古典学と文芸の創作との濃密な関係性に関する研究的視点が有効性を持つことについて論じた。

論文審査結果の要旨

本論文は、上田秋成の全文業のうち、万葉・中古和歌の研究、中古物語評論、及び古代史研究に関する論説を、近世古典学の業績として研究史上に定位するとともに、その影響下に形成された晩年の『春雨物語』を中心とする中・後期の創作の文芸的特質を解明したものである。本論文の構成が、秋成の古典学関係と文芸の創作関係に二分され、しかも両者の相関関係への視点を基調に据えているのは、そのために外ならない。

「第一編 上田秋成の古典学」は、秋成における学問の形成と、万葉・古代史研究を中心とする古典学に関する考察を、五章十八節に分けて詳述する。

「第一章 近世古典学と秋成」においては、秋成の古典学の形成に強い影響を与えた契沖の万葉学・歌学、真淵の古典学と、それに対する秋成の批判的な受容の内実を丹念に辿ったうえで、万葉研究を中心とする秋成の学問の目的と方法が、考証学的文献学とは別途に、独立した文芸批評の学として構築されたものであることを力説する。「第二章 『万葉集』研究」では、秋成の万葉歌批評の中から、万葉歌の心情・韻律・表現技法に相当する「まこと」「調べ」「巧み」という評言を抽出し、その用法を分析することによって、真淵の影響下にありながらも、その国学的文芸観から離脱して形成された、秋成独自の芸術論的批評意識に照明をあてる。「第三章 万葉歌人論」では、秋成の万葉研究のうち、主要な万葉歌人十二人に対する批評を詳細に検討し、共感意識と和歌発憤を立論の根拠とする秋成の方法上の特質を、現今の万葉研究史の先蹤の意義をもつものとして積極的に定位すべきことを強調する。「第四章 中古文芸研究」においては、『古今集』、中古・中世の歌人、『源氏物語』、『伊勢物語』、枕詞などについて論究、研究者としての秋成と作家としての秋成の矛盾・齟齬の実態をも浮き彫りにする。「第五章 古代史研究と秋成」では、秋成の古典学の中核を成す歴史意識、及び万葉・古代史研究の特色と、その創作への影響について具体的に述べている。特に、神代史をめぐる宣長との論争を詳細に検討したうえで、史書不信と歴史の不合理的に対する「憤り」を基調とする秋成の歴史意識が、著書発憤説・物語寓言説を促すに至った経緯についての見解は、従来の研究史の空白を埋めるものとして注目に値する。

「第二編 上田秋成の文芸」においては、『春雨物語』を中心とする秋成の中・後期の創作活動とその文芸的特質を、古典学との相関関係に留意しながら究明し、三章十五節にわたって重厚な論旨を展開する。

「第一章 秋成の物語観の形成と古典学・創作との関係」は、『春雨物語』を中心とする中・後期の創作の文芸的特質を解明するうえで必須とされる秋成の物語観の成立根拠と、古典学・創作との濃密な相関性について新見を提示し、間然するところがない。秋成の不遇意識と「狂蕩」的生の分析をとおして、「憤り」に発する著書発憤説を探り出し、中・後期文芸の思想的基盤に据える見解は、論者の秋成研究の核心を成すものとして見過ごしがたい。「第二章 中期の創作」においては、安永八年の紀行文から、文化三年の『ますらを物語』に至る中期の創作五篇の構想を、秋成の

学問・文芸観との関連をとおして精緻に論証し、市井の文人・学者としての精神的な自己定立、風刺の精神、「いつはりならぬ語言」、「ますらを」精神などの本質に衝迫する。「第三章 『春雨物語』」は、秋成の全文業の総決算的な意義をもつ『春雨物語』各篇の解釈学的分析をとおして、秋成の文化史観と人生観照にも広く論究する。本論文の圧巻を成す論述で、数多くの創見に彩られ、従前の『春雨物語』研究史からの超脱を刻印して余すところがない。

以上のように、本論文は、上田秋成の学問・思想・文芸の創作の三項関係の活動とその文行を、不遇意識に基づく人生観・社会観・歴史観の表出として統一的・相関的に捉える著書発憤説との関連によって実証的に究明し、特に『春雨物語』を中心とする中・後期の文芸の特質と創作の秘儀への照射を試みたものである。秋成研究史のみならず、広く万葉・中古和歌・中古物語・国学・儒学・仏教などの研究史をも丹念に視野に入れ、定説とされる通行諸説にも積極的に疑義を呈しつつ、自らの創見を慎重に導入して、秋成の全文業の史的・体系的構築をとおして秋成研究の新たな出発を促すこととなった意欲的な見解の数々は、高く評価されるべきであろう。

本論文においては、秋成自らその廃棄を望んだ『雨月物語』に言及することが少なく、従来の文芸史像とは異なる発想に立って論述をすすめているが、論者自身による著書『雨月物語構想論』（昭和52年）の論旨を冒頭に捉えることによって、より鮮やかに秋成の文芸的・思想的遍歴を辿ることが可能だったのではないか。また、『春雨物語』中の「樊噲」についての考察を欠くことには、若干の疑義も残るが、今後に期待したいところである。しかしながら、以上の要望は、いずれも本論文の主意と評価にかかわるほどのものではない。

総じて、本論文は、先行の研究業績を批判的に踏まえ、古代・中古・近世を中心とする日本文芸史の中に、上田秋成の古典学と中・後期の文芸を、初めて史的・体系的・実証的に定位したものととして、秋成研究に未踏の分野を切り開き、斯学の水準を高めたものであることは、疑いを入れないところである。

以上の理由によって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。